



11月9日(金)、館山航空基地殉職隊員の慰霊祭が、隊員・遺族関係者及び自衛隊協力会ほか自衛隊OB団体・家族会、各種団体の代表者参列のもと、「悠久の碑」で肅々と執り行われました。小俣群司令の追悼の辞では、志なかばにして殉職された11柱の御霊に哀悼の誠が捧げられ、厳しい安全保障情勢の下、指揮官以下全隊員が一致団結、海上防衛の第一線部隊として任務の完遂に向けてさらなる前進への強い決意が表明されました。 <支部長>

支部の活動概要

<10・11月活動実績>

- 10.5(金) 館山航空基地交流会(館山支部主催)
- 10.6(土) 館山航空基地開隊65周年記念行事
- 10.7(日) 千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕(千葉市)
- 10.10(木) 旧海軍予備学生慰霊祭(安房神社)
- 11.9(金) 館山航空基地殉職隊員慰霊祭
- 11.20(火) 県隊友会会勢拡大キャンペーン(館山航空基地)

<12・1月活動予定>

- 12.1(土) 支部11月役員会(コミセン)
- 12.月中旬 歴史講話・現地研修支援(佐野地区)
- 1月上旬 21航空群司令年始表敬挨拶
- 1.26(土) 支部1月役員会(コミセン)

千葉県隊友会「会勢拡大キャンペーン」 11/20(火) 館山航空基地



《庁舎4階大会議室での説明会》

隊友会が掲げる「会勢拡大」施策の一環として、今回、館山航空基地で「入会促進説明会」が行われました。説明会には千葉県隊友会から小淵会長、安達副会長及び会勢拡大プロジェクトの理事役5名に加え支部から館山、安房支部長の計9名の陣容で臨みました。群司令への表敬挨拶の後、小淵会長の開会挨拶に続いて安達副会長から隊友会の任務、事業活動等についての総括説明と参加の各理事役、館山・安房支部長からそれぞれの立場で説明が行われました。

<説明会>には、群先任伍長、各隊先任伍長・曹長クラスに加え各隊総務班長、援護室長等30名近い隊員が参加し、主催側の説明に熱心に聞き入る姿が見られました。<懇親会>は場所を基地厚生センター「無番地」に移して行われ、群司令、各隊司令も加わり、参加者全員が終始打ち解けた和やかな雰囲気の中で、公的な場?では聞かれなかった質問や本音が飛出すなど、入会への動機付け(モチベーション)に結び付ける上で効果的な企画であったと考えます。

<支部長コメント> 隊友会への入会の動機付け・入会促進とともに、「会員としての定着」の問題があります。折角入会しても「会費不払」や「音信不通」、結局は「退会申出」の道を選択する原因がどこにあるのか、このへんの実態・実情を究め、善後措置を講じることもまた今後の課題であると認識しております。



《懇親会を終えて・厚生センター「無番地」にて》

トピックス

- <平成30年秋の叙勲> 野呂 定夫会員(海) 瑞宝小綬章受章
- <第31回危険業務従事者叙勲> 北岡 明会員(海)、吉田 安宏会員(海) 瑞宝双光章(防衛功労)受章
晴れのご受章を衷心から祝福申し上げます。 <支部会員一同>

会員の異動

10月期 小林 信夫会員(海、83歳) 体調不良につき退会申出
会員として長年にわたるご尽力及び館空会会長としての協力支援に深謝するとともに一日も早いご回復を祈念いたします。 <支部長>

地元紙「展望台」に見る自衛隊・館山航空基地

先月(11月)19日の地元紙(房日新聞)「展望台」に「(黨(まゆずみ)の島)の表題で館山航空基地の記事が載っていました。「(黨の島)とは、大正初期に発行された風土記「安房の傳説」の中で、「館山湾に(黨(はるか遠くに見える連山)のごとく淡く浮いて見える鷹の島と沖の島の風情)」を詠んだものですが、それはともかく後段部分に注目してもらいたいです。前日(18日)の市長選の結果を報じたトップ記事とともに、市の行政に対する地元メディアの主唱と見るべきでしょう。

「展望台」から(記事抜粋)

「関東大震災で一帯が隆起、(黨)の島は昭和になって埋め立てられ、海軍施設となる。貴重な観光資源が形を変えたが館山海軍航空隊が置かれ、海軍施設として重要な役割を果たす。戦後は、発足した海上自衛隊に引き継がれる。現在は第21航空群が編成され、国防の航空部門で重要な位置を占める。館山市の近代史はこの航空基地とともに歩んだ歴史といっても過言ではあるまい。平成の大合併でも他の自治体と一緒にならなかった一因には、館山航空基地とそこに勤務する自衛官、基地関係者の存在がある。この基地は人口や税収構造において同市にとってとてつもなく大きな存在なのである。中略...。自衛隊基地がなかったら経済面でも館山は大幅に立ち遅れる。行政としてこの美しい館山を守っていくべきだろう。昔も今もこれからも。」

県民・市民一般に対する「防衛意識の普及高揚」

メディアがこれだけ自衛隊を「正当に評価」してくれるケースは希少ではないでしょうか。我々を含め自衛隊関係者としては「悪い気はしない」というよりはむしろ大いに力付けられるといったほうがよいでしょう。執筆者の英断に敬意を表するものです。「(市民一般の)防衛意識の普及高揚」は、隊友会が事業活動の目的として最重視するものですが、支部としても機会をとらえ知恵・工夫をこらして、微力なりとも市民一般の防衛意識の普及高揚に寄与できるよう努めているところです。部隊が広報活動に多大の努力を払っているのは、(サービスではなく)市民一般の防衛・自衛隊に対する理解を深めることにあり、言い換えれば「防衛意識の普及高揚」にほかならないのです。 <川村 巖会員(海)、支部長>

館山基地(旧軍)のライフライン(給水)を支え続けたもの

館山では戦争中の昭和13年に房州水道(株)が水道事業を始め、地下水(掘貫井戸)を水源として北条地区の一部に給水サービスを行ったと言われ、市(自治体)が本格的な水道事業を始めたのは昭和47年で、それまでは井戸が唯一の市民の生活用水源であった。このような給水環境の中で1,000名近い隊員を抱える水上機を運用する館山航空隊を維持運営する上で、水源地の建設は不可欠の一大事業であった。宮城水源地は調査段階から水源(貯水量)の不足が懸念され、近くの坊谷(「ぼうがやつ」)などに補助貯水池を設けるなど完成までに用地の取得交渉等含め3年近い期間を要し、基地への給水が開始されたのは昭和6年、開隊の翌年であった。

洲ノ崎航空隊の開隊により深刻化した給水問題

戦争さなかの昭和18年に館山航空基地と県道を挟んで洲ノ崎航空隊(「洲ノ空」)が開隊された。最盛期には1万数千名の兵員を抱える大世帯にとって生活用水の確保は死活問題であり、別に水源地を建設するにしても適当な水源がない。それではどのようにしてこの難問を解決したのだろうか。残されている僅かな旧軍の記録資料と構築物から推測してみることにする。○赤山の東側に谷(狭い道路)を挟んで通称「琵琶山?」と呼ばれる標高100mほどの小山があり、その山頂付近に巨大な水槽跡<写真1>が残っていることはほとんど知られていない。目測50mプール程度で深さが4m以上あり、3,000トン以上の水を貯えることが可能である。○宮城と笠名の境を流れる蟹田川には、ちょうど山頂貯水槽と洲ノ空を結ぶ線上に、今でも<写真2>のような鉄製の管が残っており、昭和16年製の刻印のある20センチ径の太い鉄管である。

<推測>この二つの構築物から次のような推論ができよう。

- 水源地から館山基地に至る送水管の途中に分岐弁を設けてポンプで一旦山頂の貯水槽に汲み上げ、洲ノ空へは貯水槽から直接、写真2の鉄管を経て送水する。ここで給水能力(単位時間当たりの浄水・送水量)の関係で、送水管の中間から分岐弁で山頂へ汲み上げたのでは、館山基地が悲鳴を上げ水騒動が起きることは必定である。
 - この問題の解決のため、山頂への汲み上げ時間帯を「(需要の少ない)夜間に限定」し、水の需要が多い日中は貯水槽から直接、洲ノ空へ送水することで館山基地との競合を避ける方策がとられた。
 - 送水を落差を利用する重力方式としたのは、想定される空襲時の停電に備えたものであり、難工事を冒してまで山頂に貯水槽を設けた事由が分かる。(当然ながら停電時でも送水が可能)
 - しかもこれは洲ノ空のためだけではなく、停電時はバルブの切り替え操作によって山頂貯水槽から館山基地へ給水するための措置が講じられたことであろう。(標高差の関係で水源地から館山基地へはポンプ送水であったと推定される)
- 以上は推測を交えたものであるが、戦後、洲ノ空が占領軍に提出した「軍需品等引渡目録」中の「沼地区に洲ノ空の配水池(浄化水を貯える水槽)及び送水ポンプ類」の記録と「占領軍に対し給水中、1600トン/1日」の記述が、これらの推論を裏付けると言えよう。

「戦争の傷跡、負の遺産(戦争遺跡)」の名の下に封印された「真相・実相」

「限られた水源・給水能力及び空襲時の停電対策」を一挙に解決し、終戦まで給水を支え続けたのは当時の横須賀施設部であった。建設工事を担当した当時の施設関係者の知恵と創意工夫、目立たぬ陰の努力に敬服したい。戦前・戦時中の旧軍の構築物をおしなべて「戦争遺跡」として、「戦争の傷跡、負の遺産」の旗じるしを掲げて(口先だけで)恒久平和を叫ぶ人々が少なくない。そこには真理(真相・実相)の追究もなければ真の反省(これも口先)も見られない。軽佻浮薄な考えであり、危急の際には前車の轍を踏むことになりかねないと思うのである。 <自称地域史探索マニア(海) その22>



《写真1》



《写真2》